ハイケ･ブルックス／スマントラ・ゴシャール著　野田智義訳「意志力革命―目的達成への行動プログラム」ランダムハウス講談社 2005 年 3 月 23 日刊を読む

モチベーションを超えて意志の力を追求する

１．紀元前 49 年 1 月 11 日、ユリウス・カエサルは軍隊を率いてルビコン川を渡り、当時ローマを支配していたポンペイウスに対して事実上宣戦布告をするという重大な決定を下した。「賽は投げられた」という言葉とともに、カエサルは軍隊を率いてローマに攻め入る決意を固めたのだ。ルビコン川を渡りローマの中心部に攻め入れば、もう引き返せないことは分かっていた。カエサルと彼の兵士たちがローマを奪取するか、ポンペイウスが彼らを全滅させるかの二つに一つだった。

２．カエサルの決意は歴史の流れを変えることになった。ルビコン川を渡る前には、ローマを奪取することはアイデアの域を出ず、「成就できればよい」願望にすぎなかった。ルビコン川を渡った後には、彼のすべての意志が後押しする、もはや変えることのできない流れとなった。そして、そのことこそが成功を確実なものとしたのだ。

３．「モチベーション」から「意志の力」へと移行するには、マネジャーはまさに、この決定的な全身全霊をかけてのコミットメントへの転換点を通過しなければならない。意志の力を持つマネジャーとは、自分自身のルビコン川を渡った人々である。実際に、ルビコン川を渡るまでの力と渡った後の力では大きな違いがある。渡る前にあるのは単なる願望であり、願望という原動力はしばしば移ろいやすい、うわべだけのモチベーションである。この時点ではいつでも引き返すことができる。

４．この境界点を超えると、知識と感情が融合して断固とした意図に変わる。これがまさに意志の力である。意志の力があれば、人は、実現したいと願っていることを理性と感情の双方により強く支えられるようになる。自分自身の「ローマ」に到達するまで、ほとんど取りつかれたように粘り強く行動する。背後の橋を焼き落としながら前進するにつれ、その意図は次第に明確になる。唯一の残された問題は、どのようにして到達するかだけとなる。

５．この意志の力とは、目的意識を持つマネジャーに見られる二つの優れた特徴、すなわちエネルギーと集中力の強固な支えとなるものだ。意志の力こそが、クラウス・カールに SNI で目標を追求する粘り強いエネルギーを与え、ジェシカ・スパンギンがマッキンゼーのパートナーになることを決意した後に見せた集中力の原動力となったのである。いつまでも非生産的な行動から抜け出せないマネジャーと、先延ばしや無関心、髪振り乱すほどの忙しさを克服して行動を続け成し遂げるマネジャーとを区別するのは、まさにこの意志の力なのである。

P83 ～ 84

［コメント］
意志の力とは何かを考える好著。

― 2014 年 1 月 12 日林　明夫記―